災害救援本部通信
No.15
発行日：2013年12月11日
発行所：真宗大谷派宗務所（組織部）
発行人：災害救援本部長　藤戸秀庸

歌うことが私の使命

シンガーソングライターとして活動して約8年。

私はおばあちゃん子で、幼いころからお念仏を大切にしていた祖母の子守唄を聞いて育ちました。よく戦争中の体験談を聞いていたこともあり、原爆体験者の方々の声を忘れないために、常にライブでも語っています。2011年3月11日の出来事は、ちょうど原爆の語り部として活動してきた沼田鈴子さんのお見舞いに伺った後に知りました。どのテレビのチャンネルを映し出してもやはり日本が大惨事に陥っており、画面を見ながら私は言葉を失いました。日を重ねて行く度に恐怖と不安が私を襲い、居てもたってもいられませんでした。と同時に「このまま何もしないでただ時が過ぎるのをじっと待ち続けていいのか」との疑問も湧いてきました。自問自答を繰り返す中で、自分が歌を発信し続ける側の一人の人間として、行動を起こそうとワンマンライブのツアー公演を決行しました。岡山でのライブでは、ライトの電力を極力抑え、被災地への募金を呼びかける事を決め、ツアーオリジナグッズとして描いた自分の絵の売り上げを被災地に届ける事にしました。ライブを行うことに反対の声は当然多かったのですが、この時の自分が最初の一歩を踏み出さなければ、被災地での数えきれない出逢いはなかったと思います。

そして、「歌い続ける為」にはやはり被災地の現状を見て、聞き、感じることが大切だと思い何度も足を運びました。被災地での活動は、元々ボランティアで日本赤十字社と制作していたぬりえと子供達が喜ぶようにチョコレートやバナナ、ゼリーを大量にダンボールに詰めて宮城県の七ヶ浜に通いました。

震災の影響で到着するまで数時間かかりましたが、私とマネージャーは児童館に行ってわずかながら物資を子どもたちに届ける事ができました。子供達には子供達にしか持つことのできない強さがあり、逆に大人達に元気を分けてくれたようなそんな気がしました。元気に走り回り、笑顔で私に挨拶してくれた子どもたちとの出逢いをきっかけに、仮設住宅を一つ一つ巡回し、アカペラで歌を届ける日々をスタートさせました。

正直私自身も瓦礫や被災地の現状を目の当たりにして言葉を失っていました。しかし、私には音楽があったので大切な言葉を音楽にのせて伝える事だけは出来たのです。

流された家屋の中から発見されたピアノ

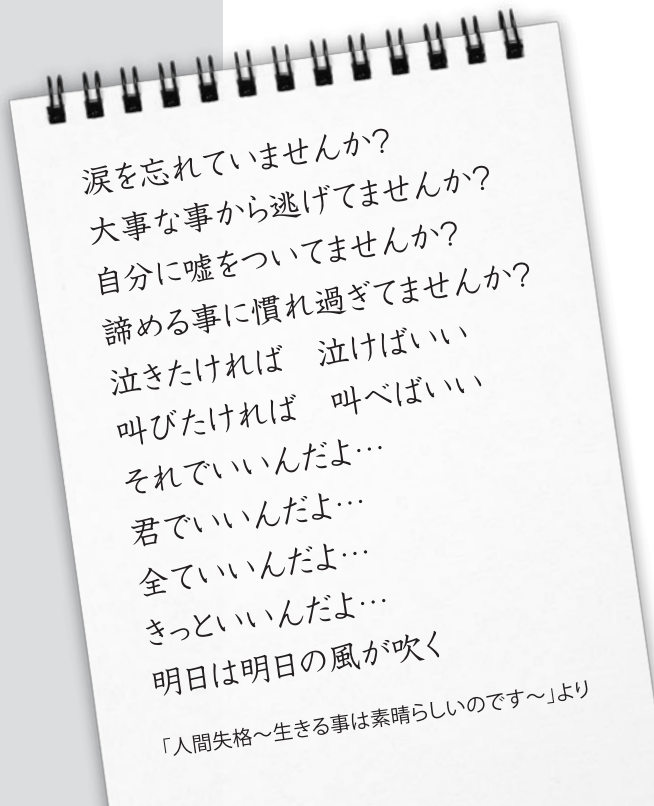
そして、七ヶ浜の海岸沿いで運命とも言える「被災ピアノ」と出逢いました。津波によって倒壊し、流された家屋の中から発見されたピアノは原型が残っているものの、やはり沢山の傷と海の塩によりピアノの弦は錆び、鍵盤は剥がれ木がむき出しになって、音も全く出ない状態でした。しかし私は、どうしてもこのピアノが気になりました。このピアノを修理することが、復興への第一歩であり、このピアノの持ち主の喜びとピアノから奏でられる音色によって、人々に生きる勇気を与えられるのではと感じたからです。そして、この日からピアノを修理させる歩みがスタートしました。

130件以上の業者から断られ続けましたが、横浜にあるクラビアハウスの松木さんという方が修復してくださいました。深い傷を負ったピアノが命の音色を響かせることで、被災者の方々、そして私たちにもう一度生きる力を希望の光を与えてくれていると思っています。特にこのピアノの純粋な音を聴いて少しでも明日の糧にしようと思ってくださった多くの方々に出逢えたことは私の財産であり、常に被災地に思いを馳せることのできる音色へと生まれ変わりました。被災地にはまだまだ問題ばかりと聞きますが、少しでもこのピアノの音色が人々の怒りや悲しみの心を柔らかく溶かし、人を信じ自分を信じ、みんなの希望をつなげる架け橋になってもらえればと願っています。

音楽がなる場所に必ず笑顔があります。その場所へ足を運んでみてはいかがでしょうか。歌う事で繋がる縁、伝え合うハートを大切に歌を歌って行きたいと思います。

Metis メティス

1984年生まれ　広島県出身。
2006年9月メジャーデビュー。
家族の愛・命・平和などをテーマに
愛に溢れた名曲を生み出している
レゲエをルーツにした
シンガーソングライター。
2013年3月13日に
仙台教区主催により開催された
「3.11東日本大震災・心に刻む集い」に出演。



涙を忘れていませんか？
大事な事から逃げてませんか？
自分に嘘をついてませんか？
諦める事に慣れ過ぎてませんか？
泣きたければ　泣けばいい
叫びたければ　叫べばいい
それでいいんだよ…
君でいいんだよ…
全ていいんだよ…
きっといいんだよ…
明日は明日の風が吹く

「人間失格～生きる事は素晴らしいのです～」より

大震災からの学び（前編）

～過去の経験と今後の対応～

現地復興支援センター

本年十月初旬、南三陸町語り部ガイドの後藤一磨さんのお話を聞いた。

経験からの油断

南三陸町の東日本大震災の震度は震度六弱でしたが、この地方の地盤は岩盤であるため、地震による大きな被害はほとんど無かったという。地震直後、気象庁の津波警報・注意報では、高さ六mの津波が予想されるとの内容であった。

この地域は一九六〇年（昭和三十五年）のチリ地震で、高さ五m程の津波が押し寄せ、被害を受けたため、その後、町を囲むように五・五mの防波堤を建設していた。

この町の震災前の人口は、約一万七、五〇〇人であり、津波によって亡くなられた方、行方不明の方の合計人数は、八二〇人程であった。この被害に遭った原因を調べると、防災無線からの再三の呼びかけにも関わらず、六mの津波であれば大丈夫だろうと考え、もし津波が防波堤を超えてきても、家の二階に上がればよいと避難しなかった人。また、チリ地震による津波は自分の家まで来なかったので、今回も大丈夫であろうと避難しなかった人。そして、一度高台に避難したが、大切な物を忘れてきたと、家に戻った人であったという。

自然災害と人災

後藤さんは「今回の津波による死者・行方不明者のほとんどが油断をしたり、判断を誤ったりと、いわゆる人災の要素が濃い」と、「自然災害とは言え、その中で実は判断ミスなどの人災によって多くの方が亡くなることもあるということに私たちは気づかされた」と、危機意識を持つことの重要性について語られ、そして「私は十八mの津波に我が家を持っていかれるのを見ながら、私たち人間も所詮、自然が許してくれる範囲でしか生きていけないという学びを得たように思います。自然災害を人間が防ごうと考えること自体、実は不遜の極みではないか。もし人の命を大切に思うのであれば、その自然災害の中で起こる人災の要素を如何に小さくするかという対策しかないのではないか。」と震災を経験した中からの教訓を語られた。

この南三陸町の市街地は江戸時代に海を埋め立て形成され、その後、人が集まり住む場所が少なくなり、更に埋め立てが繰り返され平成まで続いた。「今回の津波は、人間が埋め立てた行為によって海から奪った土地、そこに立っていた建物、住んでいた人を津波が持っていってしまったようにも思えます。そう考えると、津波が来るところにあえて私たちは住んでいたということになり、そのようなことを考えれば、実はこの町全体が被災し無くなったことも、場合によっては人災と言えるのではないかと考えます。」とも言われた。

物言わぬ語り部の存在

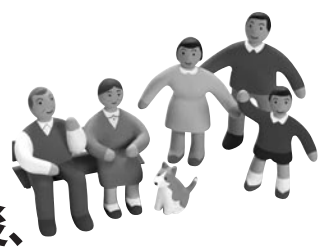
また、報道等で知られている南三陸町の防災庁舎について、「先日、町長が今後の維持経費、復興計画の妨げになるなどの理由から解体を宣言しました。今この場所は、震災がどのようなものであったか、次に災害が起こる地方の方々の言わば勉強の場所となっています。そういう意味では日本の財産となる場所ではないかと思います。これとは違うかもしれませんが、広島の原爆ドームは今残っており、そのお陰で軍都から平和都市へと変わっています。その原爆ドームの保存が決まるまで、二十年かかったと言われています。二年半程で存続についての判断をしてよいものかと疑問に思います。」と、物言わぬ語り部の存在の意味についても語られた。

今、私たちが震災から様々なことを学ぶと同時に、被災者の立場から見る復興状況、そして被災者の存在とその現状を知ること、忘れないためにも被災地に赴き、耳を傾け、語り合い続けることが必要ではないかと感じた。（続く）

震災直後の南三陸町

被災により取り壊された公立志津川病院

南三陸町防災庁舎



寺院防災マメ知識③

最大の防災、それは普段のご門徒さんやご近所さんとのお付き合い

阪神淡路大震災の仮設住宅・災害復興公営住宅での孤独死が昨年だけで61人累計1011人、そのほとんどがどこの仏教寺院やキリスト教会ともお付き合いがない人だそうです。また震災死亡者の年齢別分布では、高齢者の次に20歳から24歳が多い。これは近所付き合いのない学生が生き埋めになっていても誰も気づかず助けられなかったからと言われています。「震災前のネットワーク、災害直後のフットワーク、復興時のパッチワーク」という言葉があります。しかし平時のネットワークがないと発災時に迅速に行動できないし、復興時には継ぎ当て（パッチ）を張っていくように多様化する被災者支援の為にそれぞれの得意分野を生かして動くこともできません。自分の傍らにある小さな信頼できる人間との関係を大切にすることがおのずと防災につながっているのです。